

## テモテ第一の手紙1章12-20節 「ゆだねられた務め」

### 1A 恵みの奉仕者 12-17

### 2A 信仰の戦い 18-20

#### 本文

テモテへの手紙第一1章、12 節から 20 節までを読みたいと思います。私たちは、テモテへの手紙第一を読んでいて、そこにある主題が、「ゆだねられたものを守る」ということであることを知っています。6章20節で、「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。」とパウロは言っています。そのゆだねられたものとは、神の救いのご計画、罪人を救ってくださるご計画です。その福音をしっかりと守るように、パウロがテモテに命じています。私たちも、主から福音をゆだねられた奉仕者として、いかにその信仰の戦いを戦えばよいのかを学んでいます。

パウロは、とても単純なところに留まっています。それは、「キリストが罪人のために私たちのために来られた。」という真理です。キリストが罪人のために来られ、救い主となってくださったということです。冒頭の挨拶では、「私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエス」と言っています。そして、違った教えがエペソの教会の中に入っていたので、「そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。(4 節)」と言っていました。そして今日学ぶ本文では、15 節、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」と言っています。

パウロはローマ人への手紙で、「ローマ 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と言いました。そしてコリント第一 1 章 18 節にも、「十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」と言いました。神が罪人を救う福音は、哲学でも概念でもなく、事実、私たちを罪から救う神の力なのです。私たちは、ここ三日間、セレブレーションオブラブで、その神の力を見る恵みにあずかりました。その言葉は決して雄弁なものではありません。賛美の中の言葉、そして説教の中の言葉、祈りの中の言葉は、教会に通っているならいつも聞いていることかもしれません。しかし、聖霊は、その十字架の言葉に神の力を注いでくださるのです。人の魂を救う力を注いでくださっています。

しかし、その中に立たないで、自分たちの思惑、自分たちの何かを入れていこうとします。それをパウロは「違った教え」と言いました。こうあるべきというものを、単純な福音の言葉、神の命令以上に何かを入れます。そして聖書、律法を振り回して議論しているのですが、自分たちが何を言っているのか分かっていないとパウロは言います。

そして律法というのは、正しくない者に当てはめるものなのだ、と論じています。9-11 節を読んでもみましょう。「9 すなわち、律法は、正しい人のためではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、10 不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。11 祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。」そうですね、律法というものが私たちがいかに罪深い者であることを示す鏡であって、その罪の状態から私たちを救い出した栄光の福音があるのです。このとてつもない福音は、罪の中にいた者たちを驚くべき光の中に、その祝福の中に招き入れる神の働きであります。

そしてパウロは、その福音を自分がゆだねられた、と言っています。パウロは、テモテに「ゆだねられたものを、守りなさい。」と言っていました。彼自身が主イエス・キリストご自身から、この福音を守るようにゆだねられていました。そして今日は、パウロこそがこの福音の恵みに預かった者として、その証しをしている部分です。自分自身がこの栄光の福音を体験したからこそ、今、ゆだねられているものがいかに尊いものか、いかに固守すべきものかを教えています。

### **1A 恵みの奉仕者 12-17**

12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。

12 節から 17 節は、パウロの感謝に絶えない強い感情が表れている部分です。まず、「私を強くしてくださる」と言っています。パウロは何によって、強くされているのでしょうか？「私たちの主キリスト・イエス」と言っていますが、テモテへの第二の手紙ではこう言っています。「キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。(2:1)」この方の恵みが、私たちを強くします。この方が私たちをこのなく愛され、その愛によって選び、私たちを神の子どもにしてくださいました。全く自分はその好意を受けるに値しないのに、とどめもない祝福が注がれていること、この恵みによって強められます。他の箇所では、父なる神の栄光の豊かさによって強められる、とあります。「エペソ 3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。」内なる人が強められます。

そして、キリストが、「私をこの務めに任命して、」と言っています。この務めとは、福音を宣べ伝える務めのことです。この奉仕者、仕え人にキリストが置いてくださったということです。そして、「私を忠実な者と認めてくださった」と言っていますが、これはパウロが、何か忠実な行いをしてから認めてくださった、ということではありません。そうではなく、パウロが何もしていない時に、いや、むしろ福音の働きを妨げ、それを滅ぼそうと気が狂ったようにキリスト者を迫害しているその時に、イエス様は彼を、異邦人に福音を届ける使徒として任命されたのです。主イエスが、サウロ(パウロ)がダマスコに行って、そこにいるキリスト者を捕縛しようとしている彼のところに現われ、「サウ

口、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」と語られました(使徒 9:4)。そして、その場で回心したサウロについて、「あの人は、わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。(15 節)」と言われたのです。

ここの「忠実な者と認められた」という言葉は、「みなした」「数えた」と訳してよいのです。信仰によって義と認められた、ということと同じように、神を信じているからこそ、それだけで忠実な者とみなしてくださっている、ということです。信じがたいことですが、それが真実です。予め知っておられる神は、このようにして私たちを選び、私たちを用いようとされています。

ヤコブのことを思い出します。彼は、兄エサウをだまして、自分に殺意を抱いている兄から逃げるために父ヤコブの家を出ました。とても惨めだったに違いありません。しかし、石を枕にして寝ている時に、天からはしごの夢を見せてくださり、主の使いご自身が、とてつもない祝福の約束を下されました。「そして、見よ。主が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「創世 28:13-14 わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。」ヤコブを愛し、彼を選び、そして祝福されました。その祝福によって彼はラバンのところに送られたのです。

私たちは、このように何ら働きをする前に、恵みによって忠実な者として、福音の務めのために立たせられています。彼はその神の恵みの力に驚いて、それで神に感謝しているのです。

1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

これがパウロの姿でした。先に、9-10 節で律法は正しくない者のためにあると言いましたが、それはまさに自分自身の姿だったのです。「人を殺す者」とありますが、彼がまさにそれでした。また十戒には、主の御名をみだりに唱えてはならない、とありますが、キリストの名を否むように信者たちに仕向けました。そしてこれらを、神に仕えていると思いながら行っていたのです。ユダヤ教テロリストです。彼の証言を使徒 22 章で読めますが、3-5 節を読みます。「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。このことは、大祭司も、長老たちの全議会も証言してくれます。この人たちから、私は兄弟たちへあてた手紙までも受け取り、ダマスコへ向かって出発しました。そこにいる者たちを縛り上げ、エルサレムに連れて来て処罰するためでした。」律法に熱心であったばかりに、その義を追い求めたばかりに、かえって彼はこのような恐ろしいことを行っていたのです。ですから、彼はいかに律法が人を正しくするのではなく、むしろ、人

がいかに罪深いかを示す鏡であったかということ、彼以上に知らない人はいませんでした。

そして、「信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」と語っています。憐れみを受ける、というのは何か？これだけの迫害者は、同じ苦しみをもって神の報いを受けなければいけません。神は正しい方であり、罪に対して罰を下さない方ではありません。しかし、神は同時に情け深い方です。憐れみ深い方です。神はとてつもない寛容をもって、このような罪を身のがして下さる方なのです。そしてパウロは、「信じていないときに知らないでしたこと」と語っています。これは律法に基づいた発言で、律法には知らずに犯した罪に対する規定と、故意に罪を犯した場合の罰則が書かれています。知らずに犯した罪は、いけにえを捧げることにより赦されます。パウロはこのことを話していますが、イエス様ご自身が十字架の上でこの罪について祈られました。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ 23:34)」パウロも、自分で何をしているのか分からなかったのです。

14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。

神の憐れみを受けただけでなく、パウロは恵みを受けていると言っています。憐れみは、正義に従えば受けなければいけない罰を受けなくて済むように、神はそれを控えてくださったことを意味します。かわいそうに思われて、その思いが本来、下さないといけなかった罰を控えさせるのです。けれども、恵みは全く受けるに値しない神の祝福を受けるようにしてくださった、ということです。この恵みが、ますます満ちあふれると言っています。単に留まっているだけでなく、満ちあふれます。

そして、どのようにして恵みが満ちあふれるのでしょうか？「キリスト・イエスにある信仰と愛とともに」とあります。そうです、キリスト・イエスに対する信仰があって、初めて恵みが溢れます。恵みがあるというのは、苦しみを免れるということではありません。反対者がいないということではありません。数多くの葛藤があります。しかし、そのような時でも、どんな時、どんな状況であっても、そこに主がおられる、そして信じる者に主は報いてくださると信じるのです。こうした信仰が必要です。そして神の恵みが溢れるのです。ちょうど洪水の時に、堤防が決壊してしまうように、多くの障壁画あっても、それを乗り越えてしまうような恵みが押し流されていきます。そして、「愛」があります。主イエス・キリストがおられることを信じていれば、主ご自身の愛がそこにあるので、愛も流れてきます。このようにして、恵みの洪水があり、その洪水は信仰というものによって流れるようになり、そして信仰には愛も伴います。

15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

パウロは、深い説明をしていません。ただ短く言明しているだけです。「キリスト・イエスは、罪人

を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。」と言っています。この言葉を深く、深く、私たちが思い巡らせば、私たちがいかにこのすばらしい言葉を人々に伝えていけばよいのかが分かるでしょう。キリストがこの世に来られました。ゆえに、どんなところにも主がそこに父なる神から遣わされています。私たちが思いもよらないところに、神やキリストとはかけ離れたところにそこにキリストは来てくださいました。そして、「罪人を救うために」来られました。正しい人のところではないのです。罪の中に死んでいる人、罪の縄目にいる人のために来られたのです。この言葉だけでも、私たちが先に福音を知った者が任されている使命がいかに大きいかを思わされます。励ましは、イエス様の弟子たちに対する約束です。たった十一人しかいない弟子に、「あなたがたは、聖霊を受け、力が上から臨みます。そうすれば、地の果てにまでわたしの証人となります。」と言われたのです。地の果てまでの証言をどのようにするのか？その無尽蔵にも見える問いに対して、「聖霊の力」という約束をイエス様は下さったのです。

そして、パウロは、「私はその罪人のかしらです。」と言っています。彼は、これを大げさに言っているわけではありません、律法を知っている者のはずが、ことごとく律法に違反することを行なった、その大いなる神の怒りを受けるはずの者が憐れみを受けた、という認識に基づく者です。そしてこれを過去形で話していません。過去、罪人のかしらだった、とは言っていないのです。今、私は罪人のかしらなのだ、と言っています。

ここに恵みの不思議があります。私たちは、自分が罪人であるというところに立つのはとても辛いことです。神の前で罪を犯したということを知ることは、辛いことです。それで、罪は犯していなかった、罪はないと嘯きます。自分はそれほど悪いことはしていないと、自分には何らかの正しさ、善があると思いたいと思います。しかし、そうではありません。人は罪を犯して、神からの栄誉を受けられなくなりました。そして、罪人であることを認めた人で陥る過ちは、その罪が赦されたことを受け入れられないことです。ここに神の恵みがあります。そうなのです、罪から来る罰を受けなければいけない存在なのです。ところが、キリストが身代わりにその罰を十字架の上で受けてくださったので、神はその罪を赦し、私たちを罪なき者として宣言することがおできになりました。その時に初めて、私たちは罪赦された罪人という告白ができるのです。

パウロと同じ告白ができる人は、三つの特徴があるでしょう。一つは、喜びがあります。救われた喜びがあります。二つ目に、神を恐れ敬うことでしょう。自分とはとても罪人なのに、神に救われたことを知る時に、この神の前で恐れ震えることでしょう。それは罰せられる恐れではなく、その神の偉大さ、恵み深さに圧倒される恐れです。そして、三つ目に、神に仕えます。この方に仕えていきたいという強い願いが起こります。

16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

ここは大事な恵みの分かち合いです。パウロがここで言っているのは、「こんな罪人が救われたのだから、神はどんな罪人をも救うことができになる。」ということです。ここでの「見本」とは、そういう意味での見本です。キリストが罪人を救うためにこの世に来られたことを、罪人の頭であったパウロが日本となっているということです。それゆえ、神は彼にこの上もない寛容を示されました。しばしば、チャック・スミスが言っていました。「こんな私でも祝福されたのですから、あなたがたもイエス様は祝福したいと願われています。」

今回のセレブレーションでも、フランクリン・グラハムは、「神はあなたを愛しています。日本を愛しています。」を連発していました。そして 22 歳の時に、イエスを、自分を罪から救う方として信じて、心にお迎えしたことを話していました。こんな罪人を赦されたキリストは、日本の皆さんも赦したいと願われている。あなたがたを愛しています、ということを何度も話していました。なぜ何度も話していたのか、分かります。それは、神が愛しておられることを聞いているけれども、受け入れていない人が多いからです。神との関わりが、自分が何かをしてそれで好意を得よう、認めてもらおうとする人が多いからです。自分が何とか頑張っ、それで認められるという思いがどこかにあるからです。すべての霊的問題、また精神的な問題も、ここから来ていると言って過言ではありません。そうではなく、あなたは罪人で、死に値する罪人なのだということを、しかしキリストがあなたの身代わりに死んでくださったのだ、ということ。この愛を受け入れるのです。

17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。

パウロは頌栄をしています。これだけ、すぐれた方をほめたたえて、また祈っています。「世々の王」ということですが、永遠に生きておられる方です。何千年前の世界でも、今でも、神は変わりなく生きておられるということです。そして、その変わらない福音を私たちは持っているということです。そして、その永遠性は、「滅びることなく、目に見えない」という二つのことに表れています。この方は不滅の方です。そして、目に見えない方、すなわち目で見えるものに限定されることは決してありません。そして唯一の神ですね、これはユダヤ教の人であれば毎日唱えている御言葉、申命記 6 章 4 節にある言葉です。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」

## **2A 信仰の戦い 18-20**

こうした恵みの体験をパウロはしています。そして、福音をゆだねられました。本題に戻ります。自分が主イエス・キリストによって命じられたこの福音を、テモテに対しても守るようにと命じています。

18 私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。

テモテは、パウロによって信仰による息子です。その父のような愛によって、テモテに指令を与えています。この「命令」とは、司令官がその部下に与える指令の意味です。パウロがテモテに思い起こさせているのは、「預言」です。テモテが牧会者として召された時に、祈られて、手を置かれている時に、誰かの預言の言葉が与えられたようです。「4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。」テモテは、聖霊のバプテスマを受けました。そして牧会者となる賜物も受けたようです。教えの賜物が具体的には与えられていたのでしょう。

しかし、とてつもない反対を受けていたようです。違った教えをする者たちがいます。それが教会外ではなく、教会内に存在します。そして、それを許してしまっている人々に、「そんなことを決してしてはいけない」と命じなければいけませんでした。これはとても、ガッツにいます。しかし、テモテは気の弱い人でした。それで、聖霊の賜物を与えられていても、それを用いるところから避ける傾向があったのです。それでパウロが父の愛のような愛で、励ましているのです。

何をしなければいけないか、「信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです」と言っています。信仰の戦い、そして正しい良心を保つ戦いです。信仰とは、今ずっと話してきた、パウロが宣べ伝えている恵みの福音を信じる信仰です。神の恵みによって救われたのだ、信仰によって救われたのだという信仰です。

そして、「正しい良心」を保つことがあります。これは、良いこと悪いことを判断する物差しが、私たちの心に置かれているのですが、ここでは信仰に関わる正しい良心です。良心が汚されることと言えば、それは何よりも「罪定め」です。自分の罪は赦されていないという責めを、兄弟の告発者であるサタンは私たちの良心に植え付けようとします。それで、何とかして「あなたは、もう神に従うことのできない者となったのだ。あきらめなさい。」と語りかけます。私たちは罪との戦いをしていますし、それはとても大きな戦いではありますが、それ以前の戦いが、「罪を責められる」という良心の汚れに対する戦いです。神の恵みの中に留まる戦いであり、ここから始めて、信仰と愛によってすべてのことが始まります。

19 ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。20 その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。

パウロは、宣教旅行で海上の難を受けていましたが、正しい良心を捨てたことを「信仰の破船」と表現しています。正しい良心が、いかに純粋な信仰を保つのに必要なことかを物語っています。パウロは具体名を挙げています。これは時に必要です。教会全体に関わることについて、名前を上げなければいけないことがあります。ローマにある教会にも問題があったので、パウロがこう言いました。「ローマ 16:17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむ

いて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。」

ヒメナオという人物は、第二の手紙でも出てきます。「2テモテ 2:17-18 彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。」復活がすでに起こったと言ってしまっています。偽りの教え、違った教えというのは、どこかで不純な動機が働いており、結ばれる実がおかしいものになっています。ですから、「たかが教え、されど教え」なのです。教え、あるいは教理で間違えられたことを教えると、その行いにも悪いものが出てきます。

そしてパウロは、「彼らをサタンに引き渡しました。」と言っています。これは大きな使徒に与えられている権威のようです。コリントにおいても、近親相姦の罪を犯している男についてこう言っています。「1コリント 5:4-5 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」これは具体的には、彼を教会の交わりから切ることです。これを「教会戒規」とも言います。そしてこの目的は、教会を守るためであり、その汚れが全体に広がらないようにするためであり、そして、本人が悔い改めるその機会を与えることです。

機会を与えることはとても大切です。本人が直るだろうとこちらで勝手に思い込んではいけません。救いについても、福音を信じる機会を与えます。教会についても、通うことができるよう、その機会を与えます。自分の思い込みで、「この人は救われないだろう」とか「教会には来てくれないだろう」とか決めてしまっただけではいけません。機会を与えるのです。ここでは罪を犯し悔い改めない人が、もしかしたら悔い改めることができるようにするために機会を与えます。

以上ですが、福音の言葉が私たちにゆだねられている時に、そこには信仰と正しい良心の戦いがあり、それを勇敢に戦わないといけないということです。私たちは神の大いなる戦いの中に入られています。しかし、これは栄誉ある戦いです。すでに、私たちはイエスをキリストであり、神の御子と信じる信仰によって、世に打ち勝っているからです。「1ヨハネ 5:4-5 なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」